

令和元年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文
高等学校の部 最優秀賞



伝えること、つなげること

福島県立福島南高等学校
1年 山川 蒼奈

東日本大震災後、福島の復興のために様々な支援活動が行われている。そういった活動のおかげで、福島は新しい未来に向かって確実に進んでいる。福島県に対する風評被害についても、正しい情報を伝え続けてきたことで根拠のない偏見がなくなりつつあり、理解が確実に得られてきていると思う。

東京五輪が近づき、福島県復興という言葉が最近、よく耳にするようになった。東京オリンピック・パラリンピックの聖火リレーのスタート地点に選ばれたことは、大変光栄なことである。しかし「復興」と聞いてポジティブなイメージを持つ人もいるだろうが、よく知らない人は、かえって震災当時の印象を膨らませてしまうのではないか不安である。震災から8年たった今、平和の祭典にふさわしい地、あらたな福島として捉えて欲しい。そのためには福島に暮らす人達が、現状をしっかりと伝えていかなければならないのではないだろうか。それぞれの人が持つ復興というイメージが先行して本当の福島が見えなくなってしまうことがないように、今こそ「伝えることや思いをつなげていくこと」が求められていると思う。

私は福島県中学生リーダーズサミットに参加し、福島県の震災体験や福島が抱えている課題について他県の中学生と意見交換したことがある。ワークショップの中で、福島県の課題解決のためのアイデアをグループで出しあってプレゼンテーションをした。そのことは今の自分にいかされている。とくに他県の中学生が真剣に震災プレゼンを聞いてくれ、福島県の課題について積極的に考えてくれたことで、伝えること、つながることの大切さを実感できた貴重な経験であった。そして高校生になった今は、リーダーズサミットの運営ボランティアやブルネイとの国際交流活動に参加している。

ブルネイと福島との交流は、日アセアン青少年国際交流推進機構 See You Soon プロジェクトによるもので、福島県内の5校の高校生が参加している。ブルネイという未知の国の文化やイスラム教に対するイメージから、参加するのをためらっている生徒が私の周りにいた。その意識はまさに福島県を知らない外の人が福島に抱く偏見に似ていると、私はその時思った。私は全く知らない国だったので地理的位置、天然資源の石油による経済状況や日本との関わりなどをインターネットなどで調べて交流に臨んだ。じかにオンライン

でテレビ電話を通して現地の人と話をしたり、手紙の交換などをしたりして分かったことは、インターネットで得た情報とは大きく違っているということである。交流した当初は、イスラム教と聞いただけで怖いと思う自分がいた。しかし交流をすすめていくうちに、断食の慣習中は募金活動などのボランティアをして善意の徳を積む活動をしていること、女性がかぶっているヒジャブは無理矢理かぶらせられているのではなく、髪を見られるのが恥ずかしいという意識の表れであることなどを知った。相手の宗教や価値観について無知であった自分を、本当に恥ずかしく思った。今では、身近な学校のことなどについて SNS を通して英語でやりとりし、音楽やサッカーなど共通の話題を日本の友達と同じようにしている。交流からイスラムの異文化の生活や学生達の考えももちろん知ることができ、自分とそんなに違ってないとも思えるようになっていく。テレビやインターネットなどの情報がいきかう社会において、誰しも他国の人を偏見や先入観を持って見てしまうものである。だからこそ人と人がもっと密接にそして真剣につながることで、これからは必要な社会だと考えている。

まだ交流は始まったばかりであるが、福島地方新聞にも取り上げられるようになり、情報が発信されることで多くの人々が興味をもってくれるきっかけになった中、ある相談の電話が学校にかかってくる。ブルネイ青年を探して欲しいという依頼である。約30年前、ちょうどブルネイが独立した時に福島県飯舘村は日アセアン交流をおこなった。そのときにブルネイ青年をホームステイで受け入れた飯舘村の夫婦は、青年が帰国した後も文通で何年も交流していた。しかし、震災などで途絶えてしまい、ずっと気になっていたというのだ。相手の昔の住所や名前は情報として分かっていたが、連絡が上手く取れずにいた。新聞でブルネイ交流の記事を見て、探して欲しいと申し出てきたのである。私は飯舘村の方がそのような交流をしていたことをはじめて知った。そして飯舘村の方が避難されて数年経った今、「身辺整理をしたいと思えるようになってきた。飯舘村での思い出を気にかけてままだと嫌いだ」と話すのを聞き、力になりたいと思った。さっそく日アセアンの方々の協力のもとで、当時の日アセアン交流の資料や写真などを調べ始めた。30年前の交流を今につなげるために、高校生の仲間も協力してくれている。

長い年月と国境を越えた友情を目の前にみて、相手を思う気持ち、全く違う文化や価値観を持つ人々とつながることの意味を感じている。そしてブルネイ交流を通して「伝えることや思いをつなげていくこと」を積み重ねていけば、少しずつ偏見や差別がない世界に近づけていけるのではないかと思う。この経験をいかして福島、日本の未来のために将来はグローバルに行動できる人になりたい。